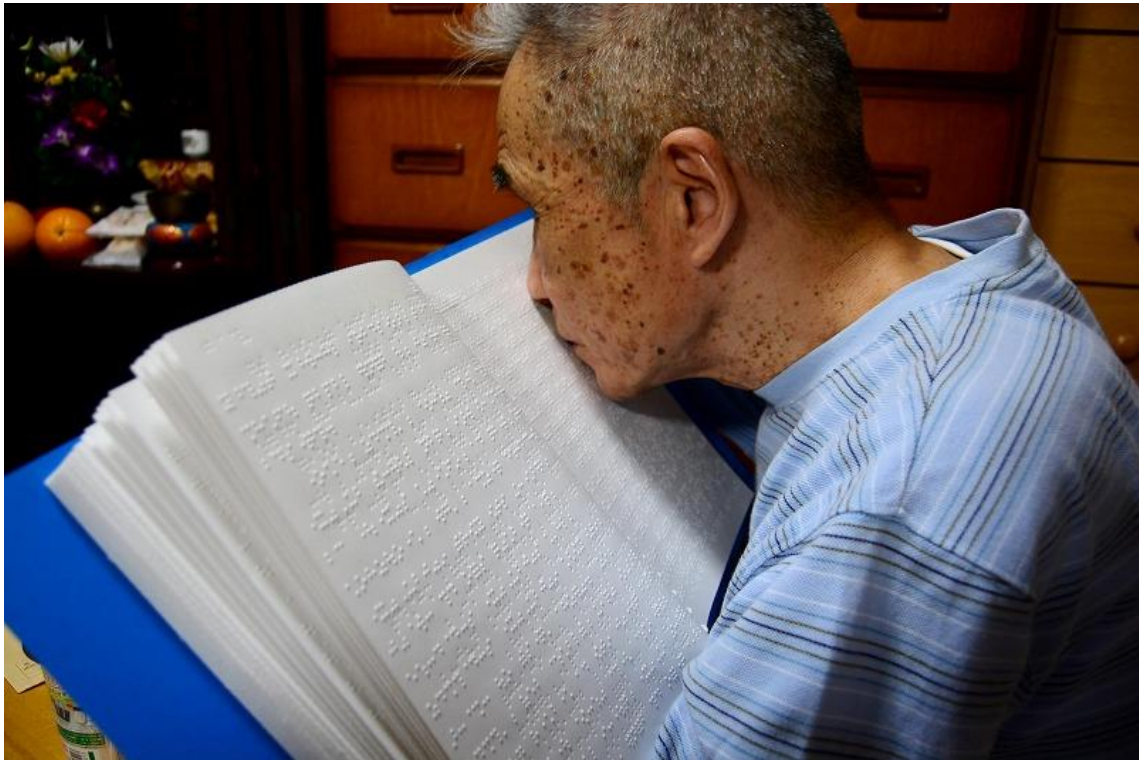


不発弾が変えた生きかた



藤野高明さん（76） 昭和 13（1938）年 福岡市生まれ

7歳のときに福岡の自宅そばの小川で拾った不発弾により、両手と両目の視力を失う。59年大阪市立盲学校（現・大阪市立視覚特別支援学校）へ入学し、64年に卒業。72年から同校の非常勤講師を経て、社会科教師に。著書に「あの夏の朝から」「楽しく生きる」など。東淀川区在住。

福岡の赤い空

私が見た戦争は、福岡の実家で体験した福岡空襲です。昭和 20（1945）年 6 月 19 日の夜中のことです。空が真っ赤にただれるように焼けた北の空を見ていたら、日付が変わったぐらいの時間に、同じ方角から大勢の人が列をなして逃げてくるんですよ。ときどき「水をくれ」と言うので、母親が「どうぞ、どうぞ」と言って一生懸命水を汲んで渡していた、緊迫した様子が目に焼き付いています。ときどき高射砲のドーンという発射音がしていましたが、200機以上もいる敵機には、なす術もなかったようです。

実家は福岡市の中心より南のほうにあったので直接の被害はありませんでしたが、翌日父親が福岡の親戚のところを回って「みんな焼けとう」と言って帰ってきました。この空襲では 1000 人以上の方が亡くなりました。

私にとって心の傷になったのは、何日か経ってからの学校での出来事です。

⑬藤野高明さん

登校すると、福岡市に収容されていたアメリカ人捕虜を空襲の報復に処刑したという話題で持ちきりでした。先生や高学年の生徒が「捕虜を殺した」と、とくとくと語っているわけです。小学生が「捕虜」という言葉を得意げに使うことに、子どもながらに違和感を覚えました。殺された捕虜が空襲したわけでもないし、抵抗もできないのに、かわいそうやなと思ったものです。

昭和 21 年 7 月 18 日の朝

私が通っていた小学校は福岡市立高宮小学校といました。そのそばを小さな川が流れていて、よく遊びにいきました。川には、たまにベルトのバックルや機械の部品が捨てられていて、子どもには宝の山のような存在でした。昭和 21 (1946) 年 7 月 18 日のことです。その川で、5歳の弟と単四乾電池のような形をした銀色の金属の部品を拾いました。「これ何かいな？」なんて言ってね。しかしそれは、不発弾だったのです。片方に穴が開いていて、中には粉のようなものが詰まっている。地面にコツコツと当てても出てこないから、釘でかき出そうとしたら、それがきっかけで爆発しました。弟は同じものをポケットにも入れていたせいで爆発が移って即死でした。私は命こそはとりとめましたが、両手と両目の視力を失いました。不発弾は後から来た警察が全部持って帰りましたので、犠牲が増えることはありませんでしたが、戦後の混乱期だったこともあって、捨てた人はただ引っ越しただけ。残された私たちには何の補償もありませんでした。

高宮小学校のすぐ隣には福岡県立盲学校があり、そこに通う学生の姿をいつも見ていました。まさか自分がその門を叩くことになるとは思いませんでしたが、実際に行ってみると、両手がなければ点字が読めないしマッサージや按摩の仕事もできないからと言って断られてしまいました。結局、13年間学校に通うことができないまま 20 歳になりました。

1 冊の本から広がった世界

転機になったのは、15歳から 20歳まで国立筑紫病院という病院の眼科に入院したことです。そこで 12回にわたる開眼手術を受けました。あるとき隣の病室にいた4歳の女の子が「藤野の兄ちゃんお手てないんやて」と言うんです。誰が教えたんやと足音も荒く入って行って、半分泣きながら「自分らも手無しになってみる」と大声でどなったことがありました。そういうことが1週間に何回か起こって、あとから恥ずかしいなと惨めな気持ちになるんです。主治医から「あなたの母親が一番心配しているんだよ。いまのあなたを見たら一番悲しむんだよ」と言われて、我に返りました。私の父は15歳のときに亡くなり、母親が1人で化粧品の行商をしながら5人の子どもを育てていました。母は、私が学校にも行けな

⑬藤野高明さん

いし、働くこともできないと思っていたようで、弟や妹が私を大事にしてくれるように願い、私のためにできるだけお金を残そうとしてくれていたのです。不自由な暮らしの心の支えは、視力が回復するという希望だけでしたが、18歳にもなるとその見込みがないことが分かってきました。学校にも行けなくて、行き場のない気持ちになり、自殺を考えたりもしました。

そんな私の気持ちを察したのか、3歳くらい上の看護学生がよく部屋に遊びに来てくれました。あるとき「私にできることはある？」と訊ねてくれたので、本を読んでほしいと頼みました。でも、世の中にどんな本があるのか分かりません。見栄を張るわけにもいかず、「あなたが読んで気に入ったものでいい」と告げると、「あんまり面白くないかもしれないけど、最近読んで感動した本だよ」と言って、北条民雄の「いのちの初夜」を読んでくれました。ハンセン病のために24歳の誕生日の前に亡くなった、筆者の自伝的な内容です。患者たちの悲惨な状況の中に、人間の生きる姿を見たような気がして、世間を知らなかったなあ、荒れている場合ではないなあ、と思いました。「どうやった？」と聞かれて、ただ「読んでもらってよかった」と答えました。

その本を通して、両手の不自由な人たちが舌や唇を使って点字を読んでいることも知りました。今風に言うと、想定外のこと。点字が、私の光になった瞬間でした。それなら自分もと思って、同室に入院していた盲学校の生徒に「点字教えちゃらん（教えてくれない）？」と頼みました。ひとつひとつの点字を覚えるのは簡単でしたが、実際に読むのは難しい。目が見える人には、字を覚えることと読むことは一度にできると思いますが、私たちは違います。最初に「読める」という実感をつかめるまで、半年くらいかかりましたね。途中で投げ出しても、入院中だったのでやり直す時間があったのです。

社会科や国語は人との関わりや耳学問で理解できますが、算数や英語は基礎から積み上げないと分かりません。13歳の男の子から分数の足し算の問題を出されても分からず、教育を受けていないことに大きな劣等感を感じました。そこで本を読んでくれた看護学生に頼んで、毎晩夕食後から消灯時間まで勉強を教えてもらいました。病院や病室の人たちも、勉強していると知ると静かに集中できる環境をつくってくれました。学べるということがただ嬉しく、楽しい時間でした。

大阪への道のり

福岡の盲学校へは、入学を頼みに何回か訪ねていきました。最後に行ったのは19歳のときです。点字が読めるようになっていたので、少し自信もありましたが返事は同じでした。大阪盲学校には私の好きな音楽のコースもあることを知り、手紙を出しました。19歳で中学部に入るということで、過年齢を理由に断られる

⑬藤野高明さん

かもしれないと思っていると、学校からの返事は「1年かけて受け入れ体制を考えたい」というものでした。そして昭和34（1959）年2月に大阪から福岡の病院へ2人の先生が派遣され、出張試験をしてくださいました。5科目のテストを受けて、さらに日常生活を8ミリフィルムで撮影されました。学力を見るのに加えて、身の自立をしていることを確認する目的だったのです。

試験の結果は、合格。「天にも昇る気持ち」というものを味わいました。福岡から大阪まで急行で12時間、特急でも10時間かかる道のりですが、遠くで1人で暮らす心配や不安より、期待でいっぱいという気持ちだったことを覚えています。母が私を大阪まで送ってくれて、晴れて大阪盲学校へ入学できました。そのとき、母は44歳、私は20歳でした。

大阪市立盲学校は当時本町にあり、私は寄宿舎に入って通いました。先生も同僚も、普通に接してくれたのが嬉しかったですね。後から聞いた話ですが、私の入学に対して、多くの先生が心配されていたということでした。その中で、恩師の岩花先生は私の入学に賛成してくれたばかりか、大阪での身元引受人までかってでくれたのです。7年間学校へ通えないという艱難辛苦のあとに、そんな嬉しいことがありました。

大阪の印象と言えば、まず言葉です。「どうしたの」と言うのに、福岡では「どげんしたと」と言って、荒っぽくてごつごつした感じやけど、大阪弁は「どないしたん？」でしょう。ずいぶんやわらかくて耳あたりが良かったです。うどんもたこ焼きもおいしいし、交通の便がいいのも気に入りました。

盲学校を卒業しても学びたい欲求は変わりませんでした。私の障害を知ると入学を断られるかもしれないと思い、日大の通信部には目が見えないことを隠して入りました。忸怩たる思いでしたよ。しかし通信部でも大学での講義があるので、登校すると、大学は十分な受け入れ体制でないことを理由に大学を辞めさせようとしてきました。学友たちが支援を名乗り出てくれたおかげで、何とか在学できました。

東淀川区での暮らし

東淀川区へ盲学校が移ったのは昭和38（1963）年5月。私が卒業する前年のことでした。最初は東成区に住んでいたのも、地下鉄やバスを乗り継いで通いました。東淀川区に引っ越してきたのは85年3月です。当時子どもたちは小学校の6年生と3年生で、二人とも近所の豊新小学校へ通いました。東淀川区に住んでよかったのは、何よりも職場に近いということです。自宅から800メートルぐらいだったので、歩いて通勤しました。盲学校の教職員も生徒も近所に結構住んでいるから、地域の人たちにはいろいろ協力いただいて、お世話になっています。

⑬藤野高明さん

妻とは近所の瑞光寺や松山神社へ行きました。淀川の河川敷を歩いたりもしました。赤川鉄橋では貨物列車のすぐ横を歩いて渡れたので、運よく列車が通ったら橋ごと揺れるのが楽しくて、子どもたちと「ラッキー！」と大喜びしたものです。妻も歩くのが好きだったから、新大阪から歩いて帰ってきたり、吹田の高校に入学した娘の通学路を確認しようと歩いて往復してみたり。盲学校が移ってきたころは田んぼが多くて、田植えの時期になるとカエルたちがやかましいくらいに鳴いていました。それが、翌年になると団地ができてしまって、あのカエルたちはどこへ行ったんだろうと子どもたちと心配したものです。夕食を食べた後、妻とカエルの声のするほうへ歩いたりもしました。

世界史が好きだったので、学校では社会科の教師になりました。30年間教えて、関わった生徒は1000人ぐらいになるでしょうか。ほとんど名前は覚えていますよ。小中学校の先生なら、生涯で教える生徒が1万人にのぼる人もいると聞きます。

若い世代に伝えたいこと

戦後70年という機会にこのような調査をされることは意義のあることですね。戦後80年には私は86歳になります。今は元気ですが、10年後の自分がどうなっているかは分かりません。今は戦争を体験した人の声を聞く最後のチャンスと言われていますが、その通りですね。

今は生き方に自信を持つのが難しい時代と言われますが、つらい時期を乗り越えるには、自分だけではダメです。恩師や家族や友達の力を借りてできるんです。私の場合は、自分がくじけたら母がどんな顔するかなあ、と思ったり、友達が助けてくれたことが支えになっています。教え子たちは、よく「先生は、学校は、企業は自分に何をしてくれますか」と言いますが、それは違うと教えています。自分の「何をしたいのか、何ができるのか、どうするのか」という考えが先になれば、道を切り開くことはできません。「努力すれば必ず報われる」という言い方がありますが、それは嘘です。報われないことのほうが多いのです。だからと言って、何もしなければ報われる可能性もなくなってしまいます。努力していれば、どれかは叶えられます。

生徒たちは「先生と比べたら自分は贅沢だ」と言うことがありますが、「人と比べるのはやめとき」と言っています。その論法で言ったら、私の立場はどうなるのでしょうか。自分よりもっと不幸な人を探さなければいけません。ハンディキャップの足し算なんてつらいものです。自分らしく生きるのがよいのであって、人と比べる必要はないのです。百人百様の生き方があるはずで、障害があると生きづらい面も不自由なことも多くて、つい自分より不幸な人を引き合いに出して慰めがちなのですが、そんなことはしないほうが良いと伝えています。